様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年３月３１日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０７２９
研究課題名（和文）　発達障害当事者とその家族における発達支援ニーズに関する語りの発達心理学的研究
研究課題名（英文）　Developmental research on the needs of support for the people with developmental disorders and their families
研究代表者
竹内　謙彰（TAKEUCHI YOSHIAKI）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：４０２１６８６７

研究成果の概要（和文）：　高機能自閉症スペクトラム障害 (HF-ASD)のある青年・成人当事者、及び、彼らを子どもに持つ母親を調査対象者として特別なニーズに関する半構造化面接を行い，得られた語りを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下 M-GTA) によって質的に分析した。その結果,「理解を求める要望」が、両者の共通点として浮かび上がった。他方で母親にのみ、「早期発見・早期対応」及び「当事者が自立した生活を送るためのシステム」についての要望が見られた。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to clarify what kind of special needs of adolescents and adults with high-functioning autism spectrum disorders (HF-ASD) and their families. People with HF-ASD and their mothers were interviewed about their special needs. The verbatim records were analyzed using modified grounded theory approach (M-GTA). Through the analysis, it was suggested that both of them have a wish that people understand the traits of ASD while only mothers have needs of early detection and treatment and needs of helping people with HF-ASD to be independent.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・教育心理学
キーワード：発達障害、当事者、高機能自閉症スペクトラム障害、インタビュー、特別なニーズ、質的分析

１．研究開始当初の背景

特別支援教育の理念からは、当事者や家族のニーズを明らかにしていくことの重要性が指摘できる。応募者が参加する研究グループでは、近年、そうしたニーズ把握のための研究に携わり、一定の成果を上げてきた（前田他, 2009; 前田他, 2008）。それらの研究においては、質問紙を用いた家族（保護者）に対するニーズ調査を行っている。特にここでは、以下の 2 点を強調しておきたい。ひとつは、早期発見と早期介入が重要だという点である。早期に気づかれ、比較的早い段階で診断がなされる場合には、適切なフォローの体制に乗りやすいが、様々な行動上の問題が気にかかりながらも診断がなされないままの場合には、適切な時期に発達支援を開始する機会を得ないままに、学齢期にまで到達しがちである。ただし、診断がなされなくとも、何らかの療育の機会が与えられた場合には、それが適切なフォローの機会ともなり、気づきから時間が経過して後に診断がなされることもある。もうひとつの点は、子どもの年齢によって、ニーズも大きく変化しうるということである。特に学齢期以降のところで、ニーズの高次化や多様化が起こると言ってよい。

現在、発達障害児の保護者に対するより詳細な調査は、応募者も参加する研究プロジェクトである「東アジアの発達障害児のための治療教育プログラム開発に関する国際共同研究」（研究代表者：荒木穂積、アジア・アフリカ学術基盤形成事業）において、日本、中国、ベトナムで、共通の質問項目を用いたニーズ調査研究が進行中である。こうした研究を通じて、発達障害児の家族が抱えるニーズの詳細が、より一層鮮明になることが期待される。

本研究は、こうした質問紙を用いた家族のニーズ研究をふまえ、やや異なる観点から、当事者のニーズに迫ることを企図したものである。近年、発達障害の当事者が自身の困難を整理して公表した出版物がいくつか見られるようになってきた（e.g., 綾屋・熊谷, 2008）。発達障害者への合理的配慮を行うためには、当事者が自らのニーズを整理する試みが重要であると考えられる。本研究は、当事者ニーズの語りを引き出すための挑戦である。

２．研究の目的

本研究のテーマは「発達障害当事者とその家族における発達支援ニーズに関する語りの発達心理学的分析」である。比較的軽度の発達障害児・者に対する、より適切な発達支援を作り上げていくための基礎資料として、当事者である発達障害児・者ならびにその家族に対して詳細なインタビューを行い、得られた語りのデータを、発達的観点から分析し、ニーズの諸相を詳細に明らかにしてゆくことが、本研究の目的である。

３．研究の方法

（１）当初の計画における方法の概略

インタビュー調査に協力いただける発達障害者とその家族を捜し、依頼する。発達障害当事者の人々は他者とのコミュニケーションに困難を抱えることが多いだけに、インタビューを行うためには、まず関係づくりに時間と手間をかける必要がある。信頼関係を形成する上では、応募者が繰り返し会う機会を持つ必要があるほか、研究協力者となる大学院生等の人たちとの間でも、インタビュイーとの間に信頼関係をつくれるよう、場の設定を行う。初年度と第 2 年度にかけて、インタビューを実施し、それと並行しつつ、語られた内容に関して、具体的なニーズを抽出する分析を質的研究方法を用いて分析し、それに対応する合理的な配慮についての考察を深める。最終年度に、必要であればさらにインタビューを追加し、最終的に報告書をまとめるほか、学会等での成果の発表を行う。

（２）具体的な方法

（２）－①　研究Ⅰ（母親を対象としたインタビュー）の方法

調査協力者

インタビューの対象となった調査協力者 は, 青年期から成人期にある HF-ASD のある子どもを持つ 12 名の母親であった。年齢範囲は 50 歳 2 か月～71 歳 8 か月。各母親は, それぞれ 1 名の HF-ASD のある子ども(女性 5 名, 男性 7 名；年齢範囲は 19 歳 6 か月～36 歳 11 か月）の養育者であった。Table 1 に, インタビュー対象者の子どもの属性ならびにインタビューによって生成された概念（後述）の数を示した。

インタビュー実施期間

2010 年 12 月～2011 年 10 月。

インタビュー・データの収集

インタビュアーは筆者が務めた。インタビューは半構造化面接の形式で行った。インタビューに要した時間は, 1 時間から 2 時間程度であった。インタビュー時における両者の発

Table 1 インタビュー対象者の子どもの年齢･性別･現状および生成概念数

対象者	子どもの年齢	子どもの性別	子どもの現状	概念数
A	27歳2か月	女性	自立訓練	25
B	24歳2か月	男性	無職	19
C	27歳4か月	男性	障害者枠就労	15
D	25歳7か月	女性	無職	20
E	33歳2か月	女性	障害者枠就労	18
F	23歳0か月	女性	障害者枠就労	12
G	26歳11か月	男性	障害者枠就労	18
H	19歳6か月	男性	大学生	18
I	22歳5か月	女性	就職活動中	17
J	35歳6か月	男性	一般就労	11
K	28歳11か月	男性	一般就労･既婚	19
L	35歳9か月	男性	家業手伝い	16

話は，調査協力者の同意を得てICレコーダーにより録音した。あわせて，筆記による記録も行った。主な質問項目は，①障害の気づき・指摘・診断，②療育の経験，③学校での経験，④現在の状態，⑤将来の展望，⑥希望・願い，の6点であった。

インタビューの実施後，録音記録を書き起こした発話の逐語記録を分析の主たるデータとした。分析にあたっては，適宜，インタビュー時の筆記記録も参照した。

倫理的配慮

調査を始めるにあたって，事前に研究の趣旨と方法を伝達いただけるよう依頼し，協力をしてかまわないと意思表示があった人を対象とした。インタビュー調査の当日に，あらためて口頭と文書により，研究の趣旨を説明すると共に，いつでも申し出ることで協力を止めることができること，ならびに，そのことで不利益を受けないこと，また，プライバシーの保護について説明し，書面による同意を得た。なお，インタビュー調査を開始する以前に，筆者の所属する大学における研究倫理審査委員会で倫理的配慮の内容に関する審査を受けて承認を得た。

分析方法の採用

発話の逐語記録を分析するにあたっては，分析方法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)(木下，2003，2007)を採用した。

分析の手順と手続き

分析の手順は，まず逐語記録のなかから分析テーマと関連した重要と考えられる部分を特定し，それに依拠して概念を生成する。そうして得られた概念と関わる具体例が発話の逐語記録の中にあるかどうかを確認する作業と，新たな概念を生成する作業を同時並行で進めつつ，さらに，複数の概念間の関係をまとめてカテゴリーを生成し，また，概念間あるいはカテゴリー間の関係についての整理作業も行う。最終的には，生成された概念間やカテゴリー間の関係をまとめた結果図を作成するとともに，分析結果の文章化（ストーリーラインの作成）を行う。

具体的な分析の手続きは以下のとおりであった。M-GTAでは，データを解釈するにあたって，その観点を定めるために分析テーマの設定が重視される。本研究では，分析テーマを「HF-ASDのある青年期後期～成人期の子どもを持つ母親の特別なニーズの発達的観点からの解明」とした。

なお，分析対象とする当事者（調査対象者の子ども）の発達時期の設定に関しても，分析を開始するにあたって若干の検討を行った。分析対象とする特別なニーズの範囲を，時系列的に話を聞いたすべての時期を対象とすると，かなり広範囲の問題を取り上げることになるが，他方，現時点のニーズに限定してしまうと，包括的な研究テーマである発達的観点からの分析にそぐわなくなってしまうのである。そこで検討のため，実際に逐語記録を読み進めたところ，現在生じている問題を理解するためには，それまでの経緯を理解することが重要であるとの認識が得られた。それゆえ，本研究で分析対象とするのは，子どもの誕生から現在までのすべての時間範囲を含むこととした 。

実際の分析にあたっては，「手順」の所で述べたように，逐語記録を読み進めながら分析テーマに関連すると思われる部分を取り上げて具体例とし，他に類似した具体例が存在する可能性も考慮しながら概念を生成した。作業としては，電子化された逐語記録の具体例該当部分を，別のワープロ・ファイルである分析ワークシートにコピーして，概念名や定義を記した。同一の対象者の他の部分やあるいは別の対象者で，先に生成した概念に相当する具体例を見出した場合には，先の分析ワークシートに加えるとともに，新たに概念を生成する場合には，別の分析ワークシートを作成した。なお，概念を生成するに当たっては，「分析テーマ」を考慮するだけではなく，データに着目する際の判断の基準として，先述した「分析焦点者」も考慮した。

概念の完成度は，その概念に相当すると判断した具体例を相互につき合わせることで検討するとともに，定義と対照的な対極例がないかどうかを常に念頭に置き，概念生成の妥当性をチェックした。そうした分析の結果は，個々の分析ワークシートのメモ欄に記入した。

次いで，生成された概念相互の関係をそれぞれの概念ごとに検討した。概念を統合するカテゴリーを作成し，カテゴリー相互の関係に関する分析を行い，まとめた結果の概要を文章化するとともに，結果図を作成した。

実際の分析プロセス

インタビュー予定者12名のうち，都合でインタビュー時期が遅くなった1名を除き，11名までのインタビューが終了し，それらの逐語記録を作成した時点で分析を開始した。語りの内容がもっとも豊富だと考えられた調査協力者Aを最初に分析し，25の概念を生成した。以後，各調査協力者の逐語記録に，順次，分析を行った。Table 1 で示した調査協力者の順序は，実際にインタビューを行った順序ではなく，分析を行った順序である。掲載の順序に特別な意味はなく，結果の整理の都合上，分析順とした。

概念を生成するに当たっては，対極例や類似例がないかをその都度検討するとともに，新たな具体例がないかもあわせて検討した。一度生成した概念であっても，他の具体例との類似性が高く，まとめることがよいと判断した場合には，新たな概念として一つにまと

めたり，あるいは，一つの概念が他の概念を吸収するようにしてまとめたりするなどの操作を行った。概念を生成しても具体例が豊富でない（およその目安は事例数，具合例数ともに2つ以上）場合には，その概念を削除することもあった。ただし，具体例が少なくとも，分析テーマから見て重要性が高いと判断した場合には，概念として残した。こうした作業と並行して，複数の概念からなるカテゴリーを生成し，結果図の作成を念頭において概念ならびにカテゴリー間の関係の検討を進めた。

調査対象者12人中10人目でいったん新しい概念が生成されなくなったのち，11人目で新しい概念がひとつ生成されたが，12人目からは新しい概念は生成されなかった。分析の全体を通じて計80の概念を生成した。先述したように統合したり削除したりすることにより，概念数は51となった。この51の概念にもとづき最終的な結果図ならびにストーリーラインの作成を行った。概念およびカテゴリー相互の関連を検討したうえで，抜け落ちている部分がないと判断して分析を終結した 。

（2）－②　研究Ⅱ（HF-ASD当事者を対象としたインタビュー）の方法

調査協力者

インタビューの対象となった調査協力者は，青年期から成人期にあるHF-ASD者7名であった。年齢範囲は20代前半から30代後半までであり，性別の内訳は，女性3名，男性4名であった。インタビュー対象者の属性をTable 2 に示した。

なお，今回調査に協力してくれた各当事者の母親に対しても，特別なニーズにかかわるインタビューによる調査を実施しており，その分析結果に関しては，すでに論文（竹内，2012b［本報告第2章］）として公表されていることを付記しておく。

インタビュー実施期間

2010年12月～2011年10月。

Table　2　インタビュー対象者の属性

対象者	年齢	性別	現状	概念数
A	30代前半	女性	障害者枠就労	12
B	20代前半	女性	障害者枠就労	10
C	20代後半	男性	障害者枠就労	3
D	10代後半	男性	大学生	3
E	20代前半	男性	就労準備中	4
F	20代前半	男性	就職活動中	6
G	30代後半	女性	一般就労	9

インタビュー・データの収集

インタビュアーは筆者が務めた。インタビューは半構造化面接の形式で行った。インタビューに要した時間は，1時間から2時間程度であった。主な質問項目は，①学校での経験，②現在の状態，③将来，④希望すること，の4点であった。

倫理的配慮

（研究Ⅰに準ずる）

分析方法

本研究では，分析の方法として修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下，M-GTAと記す)(木下，2003；2007）を採用した。

分析の手順と手続き

（研究Ⅰに準ずる）

実際の分析プロセス

調査対象者7名のうち，語りの内容がもっとも豊富だと考えられた調査協力者Aを最初に分析し，12の概念を生成した。以後，各調査協力者の逐語記録を，順次分析した。なお，Table 1 で示した調査協力者の順序は，実際にインタビューを行った順序ではなく，分析を行った順序である。掲載の順序に特別な意味はなく，結果の整理の都合上，分析順とした。

概念を生成するに当たっては，対極例や類似例がないかをその都度検討するとともに，新たな具体例がないかもあわせて検討した。一度生成した概念であっても，他の具体例との類似性が高く，まとめることがよいと判断した場合には，新たな概念として一つにまとめたり，あるいは，一つの概念が他の概念を吸収するようにしてまとめたりするなどの操作を行った。こうした作業と並行して，複数の概念からなるカテゴリーを生成し，結果図の作成を念頭において概念ならびにカテゴリー間の関係の検討を進めた。

分析では，最後の7人目まで，すべての調査協力者において，新しい概念が生成された。7人目で新たに生成された概念数は5個であった。分析順の最後の対象者に至るまで新たな概念が生成されたことは，対象者を増やすことでさらに新たな概念が生成されうる可能性を示唆するものである。しかしながら，今回の調査協力者募集で調査を受け入れた対象者は7人だけであり，また，全員がその母親からもインタビューによる特別なニーズを聞き取っているという共通性も持っており，さらに別の対象者を加えることは，データの整合性を崩すことになると判断し，今回は，この7名の対象者に基づいて分析を終結する判断を行った。

分析の全体を通じて計42の概念を生成した。先述したように概念を統合したり削除したりすることにより，最終的に概念数は36となった。この36の概念にもとづき最終的な結果図ならびにストーリーラインの作成を行った。概念およびカテゴリー相互の関連を検討したうえで，抜け落ちている部分がな

いと判断して分析を終結した 。

４．研究成果

M-GTA による分析により作成された、母親及び当事者におけるカテゴリー間の関連図を示した（図１及び２）。

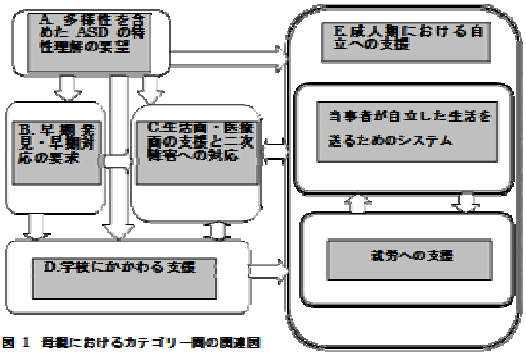

図１ 母親におけるカテゴリー間の関連図

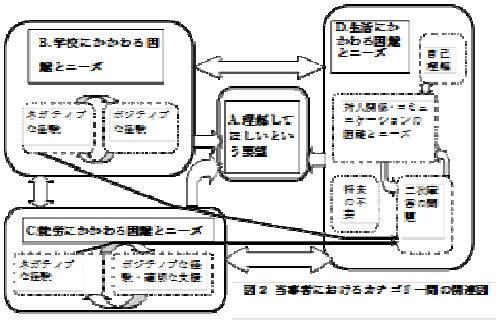

図２ 当事者におけるカテゴリー間の関連図

まず、共通点としてあげられるのは、理解を求める要望が、重要なニーズとして浮かび上がった点である。当事者においては「理解してほしいという要望」が中心的なカテゴリーとしてとして位置づけられており、母親インタビューにおいても、「多様性を含めた ASD の特性理解の要望」という概念が単独で同名のカテゴリーを構成しており、他のすべてのカテゴリーに影響を及ぼすプロセスが想定されていた。適切な配慮や支援を得るためには、何よりも周囲や社会の理解が重要であるとの認識は、HF-ASD 当事者の母親と特性に自覚を持つ当事者自身の両者に共有されるものであろうと考えられる。

また、学校にかかわるニーズ、生活にかかわるニーズ、就労にかかわるニーズの３点は、大まかには共通したものが見出されたと言ってよい。

他方、主たる違いとしては、①母親にのみ、「早期発見・早期対応の要求」というカテゴリー、ならびに②「当事者が自立した生活を送るためのシステム」というサブカテゴリーが見出されていることである。

①「早期発見・早期対応の要求」は、母親にとっては重要な位置づけを持つが、当事者にとっては想起できる記憶ではないため語られることがなかったのだと考えられる。②「当事者が自立した生活を送るためのシステム」については、母親にとって自分たち親が子どもへの配慮や支援を行うことができなくなる将来のことが切実な問題として把握されるために自立の課題が語られるのに対して、当事者にとっての当面する切実な問題は、日々の生活の困難や就労の課題との格闘であるためではないだろうか。こうした親子の認識の違いは、定型発達者とその母親の関係においても生じうるが、それがより明瞭に現れたと考えるべきであるかもしれない。

今後の課題として、多様性に応じたニーズ把握のあり方の検討をあげておきたい。同じく高機能自閉症スペクトラム障害の範疇に入る人であっても，その行動特徴は、共通性はありつつも非常に多様性の幅があることが，今回のインタビュー調査を通じて明らかになった。母親のインタビューにおいても，単に理解を求めるというのではなく，多様性を含めて理解をしてほしいという要望が出されていたことが印象的であった。当事者へのインタビューでは，さらに多様性に関する実感が得られた。インタビューへの答え方，話し方からして，一人一人個性的であった。しかし，そうした印象だけではなく，インタビューの分析から，それぞれの人がかかえるニーズもまた，多様であることが明らかになったのである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①竹内謙彰 (2013)「高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ：青年期後期～成人期の当事者に対するインタビューに基づく分析」『立命館産業社会論集』48(4), 41-58.　査読有

②竹内謙彰 (2012)「高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ：青年期後期～成人期の子どもを持つ母親に対するインタビューに基づく分析」『心理科学』33, 46-63.　査読有

〔学会発表〕（計２件）

①竹内謙彰「高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ－青年期後期～成人期の当事者に対するインタビューに基づく

分析－」『日本教育心理学会第 54 回総会』2012 年 11 月 23 日、琉球大学・沖縄県

②竹内謙彰. (2012).「高機能自閉症スペクトラム障害者の特別なニーズ(1)－青年期後期～成人期の子どもを持つ母親に対するインタビューに基づく分析－」『日本発達心理学会第 23 回大会』、2012 年 3 月 9 日、名古屋国際会議場・愛知県

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

６．研究組織

(1)研究代表者

竹内　謙彰（TAKEUCHI YOSHIAKI）
立命館大学・産業社会学部・教授
研究者番号：40216867

(2)研究分担者

なし　　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

なし　　（　　）

研究者番号：